ないだろう。あの時は、ローバーン公とブッチャーが癒着していたのだからな」
「そうだなあ。――いくらいけ好かないブッチャー一味だといっても、やられちまったら寝ざめが悪いわ」
ホークは自分の顎をつまんで思案顔をした。
「ま、ワロンを攻めるのはやめてくださいとお願いするか。ローザリアが海軍を持ったらその時は帝国にご助力いたします、とでも言えば思い直してくれるだろ」
「以前メルビルを襲った海賊の一党とローザリアが手を結びかけている。だから今はホークとの関係を良好にした方がいい。クローディアには俺からそう伝えろ、ということだな」
「よくできました。いい子だ」
眼を細めて灰色の髪をかき混ぜた。
心地いい。なすがままになっていると、額に唇が落ちた。
ホークはグレイの顎をつかんで軽く持ち上げる。ほとんど身長は変わらないはずなのに、なぜか相手がずいぶん大きく感じた。深い海の隻眼に見つめられ、胸が騒いでいてもたってもいられない。
「俺はお前の顔、好きだぜ。でもそれだけじゃねえんだ、グレイ」
「……ホーク」
「そっけないくせに人には優しいところや、口数少ないけど意外に人好きがするところとか、冷たいかと思うと自分を顧みず仲間を守ったり――時々、寂しそうな表情をするところとか」
そんなところが気になって仕方がない。と、額に押し当てられた唇が言った。
驚きすぎて、心臓が止まってしまいそうだ。ホークがそんなふうに自分を見ていたなんて。こんな――好き勝手に独りで生きている自分が、そんなふうに見られているなんて。
なにかを言う代わりに、右眼を隠すアイパッチに触れた。ざらざらした羅紗の感触が、指先から掌へ、身体中に広がっていく。
「だから、さっきみたいな顔をすんな」
低い声が耳に快い。グレイは瞼を閉じながら、今ま

で言えなかった言葉を口にした。
「お前が欲しい、ホーク」
「ばかやろ。俺に口説かせろ」
グレイの手がホークの背中をつかむ。厚みのある、上質な羊皮紙が床に落ちる軽い音が響いた。
次の瞬間、グレイの身体が宙に浮いた。ホークの手が膝の裏と背中にあてがわれ、横抱きにされていた。
「なにをする！」
グレイらしくもなく、あわてた声をあげた。降ろせともがいたが、筋肉の盛り上がった太い腕はびくともしない
ホークは小さく音をたてて、グレイの頬を食んだ。
「かわいい、なんて言うとまた怒られそうだな」
グレイは暴れるのをやめた。
「――こんな男のどこがかわいいんだ」
憎まれ口とは裏腹に、厚い胸板に頭を預ける。着古した上着の下から、鼓動が伝わってきた。力強い音が、心を穏やかにしてくれる。瞼を閉じると、
パイレーツコーストのどこにいても漂う海の薫り、それがよりいっそう強く鼻をくすぐった。
海の男の匂い、この男と知り合う前は知らなかった匂いだ。
ホークはそのまま船長室の前まで大股に歩いて行き、扉を足で開けた。
「行儀が悪い」
「両手がふさがってるだろうが」
グレイを寝台に横たえようとする。それに抵抗するように、首すじにすがりついた。
「グレイ」
とがめようともせず、背中をささえている手でなだめるように叩いた。
今まで訊きたくとも訊けなかったことを尋ねた。
「……あの時、なんであんなことをしたんだ」
「あのとき？」
ホークは小さく首をかしげた。背中を撫でる手が一瞬止まる。
ああ、と合点したようにうなずいた。
初めて一緒に過ごした夜――あの旅の間では、ただ